

## 「邪馬台国は談合で成立したのか？」

高島忠平

1、

2、寺沢薫「銅鐸の終焉と大型墳丘墓の出現」『邪馬台国時代のツクシとヤマト』抜粋

### 4 銅鐸のマツリから前方後円墳祭祀へ

こうして、銅鐸圏にあって、銅鐸のマツリから大形（巨大）首長墓築造とそれに伴う新たな祭祀の創出へと変貌を遂げたのは現在の資料による限り、キビ地域と、イツモ地域がもっとも早いことは確実である。これらの地域はA-1類型に属し、前方後円墳ないしは前方後円形大形墳丘墓の成立に先駆けて、キビの王のなかの王とイツモの王たちが青銅器のマツリを捨て、王墓でのマツリへと転換を試みていたことを示している。キビでは、共同体を単位とし各地域の部族的国家のシンボルとして首長に管理されていた銅鐸は、首長（王）の死にさいしてその霊を鼓舞し、僻邪と呪縛のための空間を結界するための特殊器台へと生まれ変わったのである。そして、その新たな呪具はほぼ同時にイツモへも伝えられ、亡き王のための巨大な墳丘を舞台装置とする祭祀は共有された。よく言われるように、銅鐸のマツリは決して鏡のマツリに変貌したわけではないのである。

しかし、じつはほぼ同じ時期かそれに先行する時期に「イト」倭国の王墓である平原一号墓でもこの変革は実現されていた。首長（王）の亡き後、新首長（王）が前首長（王）の霊を継承するためには巨大な墓墳空間を遮蔽する覆い屋が設えられ、聖なる秘儀空間が装置として出現していたことに注意しなければならない。そして対象となる霊を増幅鼓舞し、最も重要なこの祭儀を恙なく達成するための呪器として、銅矛圏では多くの巨大な鏡が、銅鐸圏では巨大な墳丘（特殊器台・壺も）が用意されたのである（寺沢二〇〇三）。

そして三世紀初め、倭国乱収拾の結果として新生なる倭国王都が纏向に建設され、おもにツクシ、キビの王墓の祭祀を集約的に整備する形で、大王墓としての新たな首長霊継承の舞台として（纏向型）前方後円墳が考案された。このとき、同じAll類型であるイツモやタニワの王墓祭祀、あるいはA-1類型かA-2類型かの判断はむずかしいとはいえ、いずれにせよ纏向型前方後円墳に先行する前方後円形墳丘墓が存在するサヌキ、ハリマ、アワのオウ墓祭祀が、前方後円墳祭祀の成立にどのように関わったかの具体化は今後の課題である。そしてついには、王権の根幹たる前方後円墳祭祀が定型化（形骸化）して各地に伸長し定着するや、弥生的伝統をもった青銅器のマツリは各圏内各地において消長を遂げ、銅鐸もまた名実ともにこの列島から消え去ったのである。

## 2、『邪馬台国時代のツクシとヤマト』シンポジウム抜粋

## 寺澤

「わたしは、邪馬台国というのは「貌志倭人伝」のなかの話ですけれども、卑弥呼の共立は二〇四年直後、公孫氏政権の「倭韓遂に帯方に属す」という記載のころであろうと考えていますから、三世紀のごくはじめに卑弥呼は共立されたのだらうと思っています。三世紀のはじめということを経考古学的に検討しますと、倭王卑弥呼が邪馬台国にいたことは倭人伝の中で明確に書かれていますから、まさに三世紀の初めという時期に、卑弥呼の王都にふさわしい場所は、これは最古の前方後円墳もろもろのことも考えて、少なくともいまの考古学的事実では纏向遺跡をおいて右に出る候補はないだらうと思っています。となると、自動的に纏向遺跡に卑弥呼がいたということになってしまいますけれども、卑弥呼はあくまでも倭王卑弥呼ですから、邪馬台国の女王だとは思っていません。ですから、纏向遺跡のあるところが邪馬台国の、つまり狭義の”ヤマト“といわれる範囲が邪馬台国だらうと思いますが、それは邪馬台国を盟主とする権力構造の存在を意味するものではありません。厳密に言えば、新しい王権、新しい政治体制が、邪馬台国の領域内に王都を設けたことを意味するにとどまります。

ということで、その権力中枢になりうる候補として、わたしは明治維新みたいなことを考えているのですけれども、つまり、薩長土肥にあたるものは筑備播讃だと思います。ツクシ、それからキビ、わたしは新興勢力となったキビが一番要素が大きい、柳田さんと多少違うのは楯築墳丘墓を大いに評価すべきだと思っています。それから、サヌキであるとか、ハリマであるとか、アワも注目すべき地域の一つです。そういう中部、東部瀬戸内のもろもろの地域、そういったものが新しい王権を支えた地域だらうと思います。ですから、二世紀に圧倒的に政治的優位であった筑紫の勢力が、三、四世紀になるとヤマトの勢力に取って代わられた原動力は何であったかと聞かれますが、ヤマトの勢力に取って代わられたのではないと思っています。まさに新しく作り上げたのだと思うのです。三世紀の初めに、西日本の多くの国々が新国家の建設を目指して作り上げたのだらうということです。それには内的必然性という問題もありますが、やはりここでさけて通れないと思うのは東アジア情勢としての外圧です。魏王朝と呉との関係がよくとりざたされますが、私は公孫氏の圧力が大きかったように思います。また、内的状況では、もはやイト国やキビなどがそれまでのように武力をもって、あるいは自分たちの宗教で、ほかの地域をもその色で塗りかえて新しい王権を作るといえることはできない状況下にあったと思います。そういう現実的な問題のなかで、新しい宗教と新しい政治体制を模索せざるをえなかったのが、「倭国乱」であり、その收拾の結果だったのだらうと思っています。」

## 3、対論

### 寺澤1

さきほど縄文的ということで、高島先生から指摘があったのは、おそらく吉野ヶ里遺跡のような非常に立派な環濠をもったものについて、纏向遺跡が環濠をもたないことから

縄文的だという意味を言われたのだと思います。しかし、わたしは逆にそうではなくて、中国の新石器時代晩期には、たとえば湖北省の石家河遺跡のように、日本の環濠集落の何十倍もあるような大きな環濠・城壁集落があるのですが、そういうものが殷晩期の王都であります殷墟を見ますと城壁や環濠がなくなってしまうのですね。王宮部分だけを桓河を利用しながら長方形に堀を巡らす大都市が出現してくるということ参考にしますと纏向遺跡というのは、まさに古代中国の都市発展史に対応させて見ると、そういう王国形成の段階に匹敵するのではないだろうかと思っています。ですから、とても縄文的という言葉は当たらない。むしろ一層発達した形態であると言ってよいのではないかと思います。

#### 石野 2

環濠をもっているほうが、田舎やいうことですね。

#### 寺澤 3

より新しい時代も射程に入れて広い視野から見ると、逆にそういうことになりますね。

#### 高島 4

環濠をもつのが田舎ということですか。たしかに吉野ケ里遺跡があるところは田園地帯で田舎ですので、それに反論する気はありませんが、やはり環濠集落にしても、日本列島の集落形成の流れから見るべきだと思うのです。その流れで見ていくと、最初は縄文的です。九州もですね。それがわたしのいう第二段階ぐらいから様相が変わってくるわけです。いわば機能分化をする。いわば宗廟、それから政治的な拠点、あるいは経済的な拠点、財政的な位置といったものが機能分化して配置されるわけですね。ところが近畿地方のものは、中央部に祭場といいますか祭祀場を置いて、あるいはそういう建物があって、それを中心にいろいろな施設が形成されて拡大していく。一貫して同心円的な発展を、わたしのいう第二段階以降もずっとたどっていくわけです。それが僕は違いだろうということなのです。それをあえて日本列島のなかで求めていくとすれば、近畿のほうは縄文的な伝統を強く残している。九州は新たな機能分化による国の首都のようなものを作っているということなのです。けどどっちが遅れているか進んでいるかということではない。田舎であるとか田舎でないということではないのです。

山尾先生がおっしゃったように、むしろそういうところにこそ、いろいろなあつれきや矛盾が蓄積されていく可能性があるわけです。新たな首長制による政治的な社会を作らなければならない段階にきているのだけど、縄文的長老制の下に社会が規制されている。そういうあつれきが近畿の弥生時代にあるからこそ、四世紀になって大きな変革を遂げるのだとわたしは考えています。

#### 高島 5

私は鏡の主たる機能は、祖霊祭祀の祭器であると考えています。これは北部九州の弥生時代中期に成立する祖霊祭祀で培われていくもので、これは古墳時代になっても基本的に

継承されると考えています。また同時に、その鏡をもっている人の身分を表すものとも考えています。そして鏡はいわば祖霊の依代であるということですね。これは時代が新しいのですが、出雲国造が人和へ出仕したときに祝詞を奏上するのですが、その中の一部に大国主命の和魂をこの鏡に託してきたということを述べています。時代的に新しいので、それを弥生時代にさかのぼらせるのは、あるいは無理があるかもしれませんが、鏡を依代とする考え方は弥生時代からあると考えておまして、これが古墳時代にも継承されるのですが、この鏡は中国からの舶載品が基本になっていると考えています。

古墳時代になると、これが棺内に副葬されて、その人の身分を直接表すわけですが、棺外に三角縁神獣鏡を中心とした大量の鏡が、わたしからすれば供献、献上されるわけですね。わたしはこれが弥生時代の鏡の副葬のあり方と、古墳時代の副葬のあり方の大きな違いであると考えています。鏡に象徴される祭祀権を献上した相手側、いわば副葬品としてもっている人への祭祀権の付託だと考えています。祭祀権の付託は、同時に政治的な従属を表すわけですし、あるいは上位の支配者から見ると、下位の支配者を政治的に従属させるという意味をもっているのではないかと思います。それがわたしの年代でいえば、四世紀に活発に展開される。それは各地に王権や、あるいはもっと広域的な王権が成立する段階ではないかと考えています。三角縁神獣鏡というのは、そのために用いられたいわば儀礼的に、大量に用いられた鏡ではないかと考えています。

#### 高島6

弥生時代の祭器の終焉と、いわば前方後円墳の成立といいますか、墳墓祭祀への変化、そういう寺沢さんのお考えがあったようですが、わたしは違う考え方をもちます。わたしは銅矛、銅剣、銅戈、ならびに銅鐸というのは、さきほど、へき邪であるとか農耕祭祀であるとか、あるいは農耕祭祀のスピリットである稲霊とか穀霊、こういったものを運ぶ動物を信仰する。いわば精霊信仰の祭器ではないかと考えています。わたしはそういう精霊信仰が支配的、あるいは重要な部分を担っていた時代から、祖霊信仰、いわば鏡を用いた祖霊信仰が支配的な力をもってくる。そういうことによって、銅剣、銅矛、銅戈、あるいは銅鐸の祭祀が終焉していくのではないかと考えています。ですから、鏡と銅鐸や銅矛、銅剣、銅戈と一緒に埋納されることはありません。鏡は、むしろ副葬品であるということが一貫してあるわけです。取り扱い上の峻別がされているというか、そういうところから見て、わたしは弥生時代、青銅器いわば銅鐸に象徴される祭祀の終焉というのは、精霊信仰が支配的な社会から、祖霊信仰が支配的な社会へと、あるいは政治社会へと転換していくととらえてみたらどうかと考えています。

#### 寺沢7

わたしは、いま高島先生が言われたように、二段階方式で弥生時代の青銅器のマツリから終焉までを解決するというのは反対なんです。もう少し段階的にとらえる必要があるだろうと思います。基調報告ではふれられませんでしたので、少し観念的な世界の話にふみ込

むこととお許し願いたいと思います。

なぜそんなものが祭器になったかという、わたしはやはり青銅器を鑄造するときの錬金術といいますか、自然界に存在する鉱物という無機質の物質から重要な機能をもった有形のものが生まれ出てくるという、いわば誕生の驚きが祭器への道を開いたと思うのです。北部九州が現実的な武器形をシンボルとし、そして近畿が銅鐸という、なんとというか観念的な物体をシンボルとした的というか、豊穡祈願のもとにできてきたのですが、一時そういう政治的な使われ方をしたために、後期の銅鐸というのはより政治的祭器へと変貌を遂げるというのがわたしの考えなのです。イト国を中心とした巨大な銅矛を自分たちの国家や共同体のシンボルとして、あるいは神としてあがめるような社会と、銅鐸をひたすら巨大化していった、その観念の中で自分たちの国家、共同体の安寧を願う、そういう後期社会の変貌のなかで、首長じたいがマツリを主宰する者から管理する者へと成長していくという考えなのです。さらにそれが二世紀末から三世紀への政治的事態の中で生まれた、首長霊という新たな概念を介在させないことには、新しい前方後円墳の祭祀には昇華されないだろうと思っているのです。

ですから、鏡についてもわたしは高島先生のように、祖霊祭祀の道具だとは思っていません。柳田さんは鏡の大きさで所有者のランクが明確にあるとおっしゃいましたが、まぎれもなくイト国とかナ国に副葬される鏡というのは大きいですし、佐賀平野にあるものはもう一つ下の大きさになりますし、この頃の伐製鏡は決して大形のものはありません。さらに東へ流れていくのは破片であったりとかするように、鏡のランク、量からいってもこれは非常に政治的な、首長の階級的権威を表す威信財であったというのが、本来的であるわけなのです。そして、鏡の扱い方じたいもやはり変化を遂げていくわけで、それが二世紀のある段階から北部九州で鏡を割るようになる。平原一号墓では大量の大形鏡を割る。祖霊の道具であるならば、割るという行為がなぜ必要なのでしょう。割るところから、わたしは首長の霊の継承という観念の存在が考えられるだろうと思っております。

時間がないのであまりその話はできないのですが、この首長霊の継承が纏向遺跡のホケノ山古墳のなかで、おそらく秘儀として、行われていた形跡がありますが、そこでもやはり鏡は割られています。それからついに鏡が割られなくなる段階が次にくるわけです。そういうことが全く形骸化してしまう。そういう首長の霊の継承という儀礼は、古墳のなかではやらないでほかの場所でやる。箸墓古墳の段階はすでにその段階なのだと思うのですが、そういう流れがあるのだろうと思っています。

石野 8

首長霊というのは首長の霊ということですね。祖霊は先祖の霊ですから、首長霊と祖霊は違うということですか。

寺澤 9

はい。穀霊や地霊の世界、祖霊という観念は北部九州にもありますし、近畿でもあります。

祖霊は近畿では家族墓のなかで生まれてくるのです。人間の形をした各種像があります。その顔が中期の後半には銅鐸に取り入れられますから、この頃には近畿周辺の地域でも祖霊の観念、祖霊が首長レベルに達していたと思います。穀霊と祖霊というものが合体し、首長霊という観念が生まれてくるのは特殊器台が成立する頃だろうと考えられます。

高島10

わたしは「国」の成立した段階であると考えております。そしてここに新たな祖霊信仰が成立します。その祖霊信仰が、政治社会統一の支配的理念として発達、確立いたします。祖霊祭祀、祖霊信仰というのは、縄文時代からありますが、この弥生時代の祖霊信仰は縄文時代の祖霊信仰とは違った形をみせます。これは、農業が基本的な背景にあるからです。一定の土地で労働をおこない収穫を得る。それを子孫に引き継いでいくことができます。子孫からすれば、祖先からそうした労働や収穫にもとづく豊饒が受けられるということで、自分たちの存在そのものが祖先の霊、あるいは祖先に影響を受けているという考え方ができます。これが祖霊信仰と呼ばれるものです。

これも研究者によって、文化人類学や歴史学者のなかで、日本ではもっと新しくしか成立しないという考え方がありますが、わたしは、弥生時代にすでに成立していると考えております。これは、父方か母方かは別として、一定の血統に連なる、あるいは、特定の身分、首長や祭儀者、祭事者といえますか、そういう身分に連なる祖先の霊を信仰する、そうした段階であるということでもあります。そしてとくに、首長の墓と思われる大型の墳丘墓や特定の墓域の前で、大規模な祭祀が継続的におこなわれる現象があります。これは、まさに祖霊信仰というものが、その社会の支配秩序・支配理念として確立したことを示しているのではないかと考えています。また、この列埋葬を見ていきますと、この埋葬のなかに多く見られる、戦闘を想起する資料があります。すでに最初から首がなかったり、体に傷を負ったり、あるいは、青銅の剣や石の剣が、骨に食い込むまで突き刺さっていたりする例が、北部九州を中心にたくさん認められます。ネガティブな例を含めると、百例をすでに超えていると思います。おそらく、墳墓の埋葬なり、墳墓や遺体の残り方というのがありますけれども、この時期というのは、こうした戦闘がきわめて活発におこなわれていたという状況を示しているものだと思います。

これは、紀元前二世紀後半からしだいに顕著になる武器の副葬と関係してしまして、武器・武具を備えた武力が、首長をはじめ、指導者によって貴重な意義と役割を担ってきているということと、併せて考えることができます。わたくしは、この武力の行使、あるいは戦いというのは、いわば首長制による「国」の成立、確立をめぐるものであったと考えています。そういうふうに、北部九州の中期の社会というのは、墳墓に象徴されるように一つの「国」の成立を示しています。そして、「国」の支配理念、社会的秩序の理念である祖霊信仰が確立し、首長制とドッキングして、当時の「国」の支配秩序となっていたと考えております。

高島11

わたしは当然九州説なのです。これは一七九頁の図 1 を見ていただければおわかりと思いますが、北部九州にもこれだけの国があるわけですね。このなかに『魏志倭人伝』に正確に登場する国は六つもあるわけですから、なにも近畿地方のお世話にならなくても、じゅうぶん邪馬台国の三〇国連合は成立するということです。さらに重視すべきだと思うのが平原遺跡です。これもたぶん女性が埋葬されているのだらうと言われています。破碎された鏡などから見ると、これはたいへんな呪力、霊力をもった女性が亡くなったために、その呪力や霊力を封じるために、あれだけの鏡が必要だったのではないかと思います。この段階で、国の統括だけではなく、地域的な国の連合を統括できるような巫女の成長があると思うのですね。この延長線上にわたしは卑弥呼の巫女王を考えるべきではないかと思っています。破碎された棺外に封じられた鏡は、北部九州に多く見られます。同様の意味をもつと考えています。

しかし近畿地方には、まったくそういうものが弥生時代に読み取ることができません。『三国志』の三十巻、「烏丸・鮮卑・東夷伝」の冒頭に、東夷の地域には霊、いわば鬼神や鬼道を祭る儀礼がよく残っているということが書かれています。寺澤さんがおっしゃるように、なにも新しいものではなくて、伝統的な祖霊を中心とした祭儀があるということを書いています。そういう地域を調査して、それを記録に残して新たな中国の礼の復活をするということが書かれています。そういうことから見ても、この巫女王の出現ということを考えて、これは九州に求めたほうが、あるいは後の九州における女性の首長の存在の多さからみても、九州に邪馬台国は求めたほうがいいのではないかと考えています。五百近くあります。だから五百の国があるとはいいませんけれども、弥生時代に国を形成、あるいは形成しつつある、あるいはまたそれよりもまだ前段階にあるような地域が、この地域にはあると思うのですね。だから三十国をこのなかに分布させるのは、あまりにも拡散してしまうのではないかと考えています。このへんが論拠ですが、今回はちょっと別の意味から邪馬台国を、九州説をお話したいと思っています。卑弥呼は皆さんご存知のように巫女王、シャーマンの王ですね。では、そのシャーマンの、いわば巫女王の系譜がどのように弥生時代にたどることができるか。卑弥呼は突然でできたわけではないですね。やはり伝統的に培われた巫女であるわけです。霊力に優れた巫女であるわけです。それを見ていくと、弥生時代の中期前半に、多紐細文鏡をもつ巫女と思われる人がいます。

これは賓棺とその埋葬品としてでてくるわけですが、つぎの中期中頃になると、貝輪をたくさん身に付けた女性がでてきます。吉野ケ里遺跡の近くで花浦遺跡という遺跡がありますが、ここに囊棺を埋めるための共通の墓坑をもって二つの要棺が埋納されています。これは二人とも女性でして、腕に二十数本を越える貝輪をしているわけです。これはどうぜん巫女だと考えられます。われわれは親子関係、母と娘ではないかと思い、遺伝子の調査をしました。ところがまったく関係がありませんでした。

おそらくこの段階で、弥生時代の巫女には、社会的地位をもった職能をもつ社会的職制と巫の間に階層差ができあがっているのではないかと、制度というか、巫女の社会的な存在

というのが確立しているのではないかと思います。までは、墓域の形成は親族・氏族単位で営まれていて、前代の伝統を引いていると見られます。前代というのは、縄文時代です。政治的な権威を示すような武器の副葬はありません。後期になおそらくこの段階で、弥生時代の巫女には、社会的地位をもった職能をもつ社会的職制と巫の間に階層差ができあがっているのではないかと、制度というか、巫女の社会的な存在というのが確立しているのではないかと思います。また紀元前一世紀の後半に、これは柳田さんが調査された三雲遺跡の一号棺と二号棺があります。二号棺は女性だと考えられています。わたしはこれは巫女王であろうと考えています。一号棺のほうは世俗的な男子の王であろうと考えております。

すでに地域的な社会、三雲の国では、そういう聖と俗の二重政体によって統括される国が成立しているということでもあります。

さらに重視すべきだと思うのが平原遺跡です。これもたぶん女性が埋葬されているのだろうとされています。破砕された鏡などから見ると、これはたいへんな呪力、霊力をもった女性が亡くなったために、その呪力や霊力を封じるために、あれだけの鏡が必要だったのではないかと思います。この段階で、国の統括だけではなく、地域的な国の連合を統括できるような巫女の成長があると思うのです。この延長線上にわたしは卑弥呼の巫女王を考えるべきではないかと思います。破砕された棺外に封じられた鏡は、北部九州に多く見られます。同様の意味をもつと考えています。

しかし近畿地方には、まったくそういうものが弥生時代に読み取ることができません。

『三国志』の三十巻、「烏丸・鮮卑・東夷伝」の冒頭に、東夷の地域には礼、いわば鬼神や鬼道を祭る儀礼がよく残っているということが書かれています。寺澤さんがおっしゃるように、なにも新しいものではなくて、伝統的な祖霊を中心とした祭儀があるということを書いています。そういう地域を調査して、それを記録に残して新たな中国の礼の復活をするということが書かれています。そういうことから見ても、この（礼の祭儀を行う）巫女王の出現ということを考えると、これは九州に求めたほうが、あるいは後の九州における女性の首長の存在の多さからみても、九州に邪馬台国は求めたほうがいいのではないかと考えています。